

わたしは、問いを持って生きていく
— 修士前期を終えて、感じること・踏み出したこと —

■ **見えなかった自分に、言葉を与える半年間だった**

この春、大学院に入学し、私は自分の過去と向き合い、今の足場を見直し、これからの進む道を考える時間を手にした。看護師として、医療的ケア児の親として、そしてメディアという“伝える”仕事に携わる者として——それぞれの立場で抱えてきた“問い”に、少しずつ輪郭が与えられていく感覚があった。講義を受け、取材を重ね、文章にまとめていく中で、私は何度も自分の内側の声に耳を澄ませることになった。それは、他者の言葉に出会うことでもあり、自分の言葉を取り戻していく作業でもあった。

■ **「伝えること」もまた、ケアになると知った**

中島久美子先生や前村聡先生から学んだのは、「報道」や「記者」が、ただ事実を伝える職能ではなく、人の痛みに対して誠実に向き合う存在であるということだった。逃げずに、隠さず、ごまかさず、数字の奥の“異常”を見抜く。ときに、医療が見落としてきた人に、もう一度光を当てる。そうした仕事が、「医療の一部」になることを、私は確かに感じた。「書くこと」「伝えること」も、誰かを支える“ケア”になりうる。この半年間、それを何度も確信する機会に恵まれた。

■ **「制度を知ること」は、生き方を選ぶようにすること**

近藤瑛佑さんへの取材や、伊原先生・高端先生の講義を通して強く感じたのは、「制度を使いこなす力」への憧れだった。医療的ケア児の母として、脊髄損傷の父の介護者として、制度の“恩恵”も“限界”も私は知っている。だけど今、それを「語れる言葉」に変えていきたいと思っている。構造を知ること、誰かの「できない」に「できるかもしれない」という選択肢を届けたい。“制度の翻訳者”として生きる可能性に、私は自分の道を見い出しつつある。

■ **「人を理解する」とは、「一緒に迷うこと」**

秋山正子先生、小浦詩先生、山中光茂先生、コアラゲんはいごうまんさん——多くの方々の語りから学んだのは、「支援」や「ケア」が決して“教えること”ではないということ。「理解しようとしてくれる人」「一緒に考えてくれる人」こそが、どれだけ力になるかを、私は身をもって知っている。

「安心して絶望できる人生を」

「挫折じゃなくて左折だよ」

そうした言葉に、私は何度も立ち止まり、救われた。

私自身も、誰かにとっての“問いの伴走者”でありたい。

それは、母として、看護師として、そして書き手として、変わらない願いだ。

■ **「問いを持ち、問いを渡す」人になる**

写真家・松村和彦先生は、「知ることが薬になる」と言った。私は、あの言葉をずっと忘れないと思う。
この半年、私自身が「知ることによって救われてきた」。だからこそ今、私は誰かに「問いを渡す」人になりたいと思っている。

たとえば、認知症に向き合う人に

たとえば、在宅で看取ろうとしている家族に

たとえば、制度のはざまで揺れる親たちに

「あなたの感じている違和感には、ちゃんと名前があるよ」

「あなたの迷いは、社会の構造にも関係しているかもしれないよ」

そう問いを手渡せる文章を、私は書いていきたい。

■ おわりに：バラバラだった点が、静かにつながった

取材を受けるなかで、近藤さんに言われた「一貫性がありますね」という言葉が、いまでも私の中に残っている。

NICU、ストーマ、医療的ケア児、地域看護、在宅介護、制度のはざま。

バラバラだったように見えた自分自身の経験が、「問いを言葉にして社会につなぐ」という視点で、静かにつながっていくのを感じている。

私の問いはいつも、「声にならない声は、どこにあるのか？」ということに尽きます。その問いを手放さずに、後期もまた、耳を澄ませながら歩みを続けていきたいと思います。

最後にゆきさんへ

言葉にできないままだった違和感や戸惑いに、そっと光をあててくれる人。私にとって、ゆきさんは、そんな存在です。

「共に生きる社会とは？」という問いを、初めの講義で、ゆきさんと一緒に立ち止まって考えたことで、私は初めて、自分が何を大切にしたいのかを見つめ直せたように思います。

制度でも立場でもなく、「一人の人」として、どこまで関われるのか。

声を届けるとはということか。

ゆきさんが紡ぐ言葉の温度が、私にそうした問いをくれました。

講義が終わった後も、その余韻はずっと残っています。そしていま、私自身も“問いを手渡す人”でありたいと思うようになりました。

出会ってくださって、ありがとうございました。